

「モーセの死」

2014年05月14日

モーセはエジプトの奴隷にされていたイスラエル人を解放した、イスラエル史の中で、最も尊敬されている人物である。屈強な肉体、どんな苦難にも耐える忍耐力を持ち、そして寡黙な人である。燃える柴の間から「わたしはある」と名乗る神と出会い、「出エジプト」の奴隷解放を無理やりに命じられる。エジプト人の初子(ういご)殺害事件によって「出エジプト」は成功する。海の水が分かかれ、追って来たエジプト軍から逃れる。シナイ山で「十戒」を授けられ、守ることを約束して神との契約を立てる。神が与えてくださるといふ乳と蜜の流れる約束の地・カナンを目指して、荒れ野を40年間放浪する。ドラマチックな出来事が続き、読む者の目を釘付けにする。

モーセの生涯は、一言で言えば、ただただ「忍耐」であった。荒れ野の放浪は、今でいう、難民の死の行軍のようなものである。水に渴いた民衆は「荒れ野で殺すつもりか」と石を投げてモーセを殺そうとする。食べ物に飢え「肉鍋を囲んだエジプトで死んだ方がましであった」と不満を訴える。そして、モーセがシナイ山で十戒を受けていた不在の間、不安と恐怖に襲われた民衆は、モーセの兄・アロンに要求し、金の子牛の偶像を作って、これまで守り導いてくださった神を見失う。更に、弱小集団であっただけに、多民族との厳しい緊張もあった。約束の地・カナンを目指す荒れ野の放浪生活において、モーセの苦悩は計り知れない。

モーセの死は残酷である。神はモーセをピスガの山頂に連れ出し、カナンを見渡させる。そして「これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見えるようにした。あなたはしかし、そこに渡って行くことはできない」と言われる。苦難を乗り越え、忍耐をもって、導いてきたモーセは、なぜカナンに入れぬのか。

民数記20章に、水に渴いた時、神は「岩に水を出せと命じなさい」と言われたが、モーセは岩を二度、杖で打った。それが、神を信じなかったこととみなされ、カナンに入れぬ理由とされている。

また、申命記1章に「主は、あなたたちのゆえにわたしに対しても激しく憤って言われた。『あなたもそこに入ることはできない』」とある。イスラエルの民衆の罪を負わされ、カナンに入れぬ理由とされている。

私は第三の説を取りたい。もし、モーセがそのままカナンに入った場合、彼は神のように崇められるであろう。神はそれを許さない。「出エジプト」の奴隷解放はモーセが行ったのではなく、神が貫徹されたことを示すためにモーセをカナンに入れなかったのではないか。「モーセは死んだとき百二十歳であったが、目はかすまず、活力もうせてはいなかった」とある。しかも、墓に拘るイスラエル人が、モーセの葬られた場所を誰も知らないと書かれている。苦しみ抜いてきたモーセは、氣力、体力も十分にありながら、約束の地・カナンを目の前にして入れぬ。モーセは、神の言葉をどのように受け入れたであろうか。彼は「出エジプト」のために用いられた。しかし聖書は、神が導いた救いの出来事であることを示している。ここに、聖書の信仰がある。そして、全ては神の支配、御手の中にあるということに真の人間解放があるのではないか。